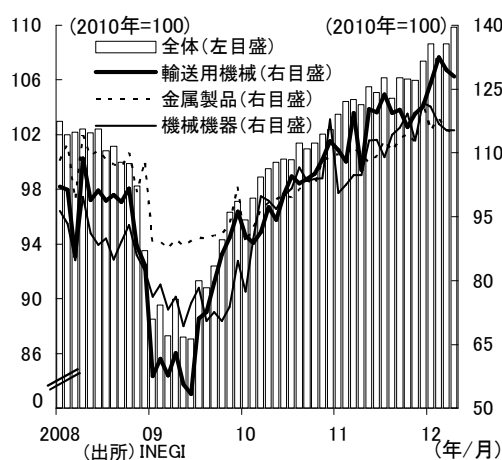


再加速するメキシコ経済

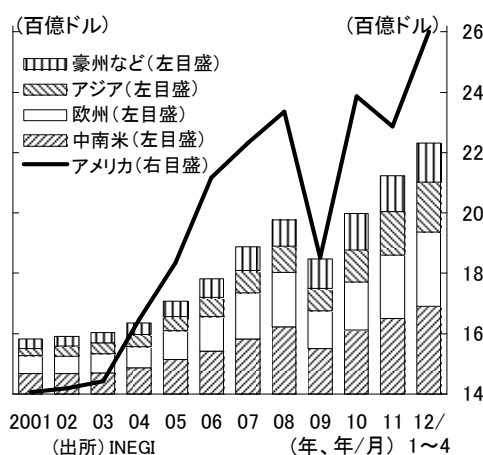
～ 生産拠点化と内需拡大が原動力 ～

- (1) 本年入り後、メキシコの製造業生産が再加速（図表1）。昨春来の増勢鈍化から回復。四半期の推移をみると、前期比年率増加率は昨年1～3月期以降、9.0%、3.0%、2.8%、3.2%と低迷した後、本年1～3月期6.9%へ。4月も増勢を維持し、1～3月期比で同5.9%。仮に4月の前期比増加ペースが5～6月も続くと、4～6月期は10.6%と2桁増に。
- (2) リーマン・ショック後のV字回復と昨年末からの生産再加速は輸送用機械など機械工業が主導。3～4月は減速し、所得雇用環境の改善を映じた消費盛り上がりで食料品や繊維など内需型が牽引。もっとも同国経済は輸出主導型。ちなみに昨年、自動車生産台数256万台のうち214万台が輸出。過去10年間の輸出をエリア別にみると、まずアメリカ向けが中心（図表2）。しかし近年、年を追ってシェア減。2000年代半ばまでの9割から昨年来7割強へ。代わって中南米向けをはじめ欧州やアジア向け輸出が増加。中南米向けではコロンビアとブラジルが増加の中心。
- (3) アメリカ向けは若干ながら昨年前年比マイナスとなったものの、本年に入ると再び増勢回復。背景に競争力の向上。これまで、中国をはじめコスト競争力に優る新興国への生産移管が進行。しかし近年、コスト上昇に伴い新興国の競争力が次第に低下。例えば賃金をみると、北京や上海をはじめ中国はすでに高水準（図表3）。一方、グアナファトやモンテレイなど、同国各都市は競争力回復。さらに中南米諸国と比べても競争力を保持。アメリカ向けのみならず、このところ急成長を続ける南米各国向けの生産拠点としても同国を再評価する動きが拡がり。
- (4) 対内直接投資は引き続き高水準（図表4）。加えて本年入り後、証券投資が盛り上がり。短期間でのシェア確保が主眼に。周辺国の経済成長は同国生産拠点化を後押し。積極的な外資流入は輸出に加え、投資を起点に内需押し上げ。本年の同国経済は4%成長の見通し。

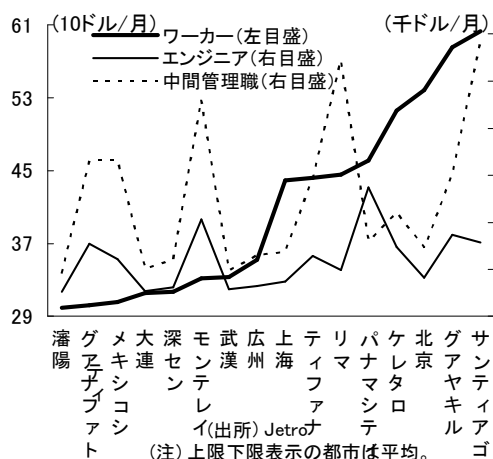
（図表1）メキシコの製造業生産指数（季調済）



（図表2）エリア別輸出金額（季調済年率）



（図表3）中国とメキシコなど中南米主要都市の賃金



（図表4）対内対外直接投資と証券投資

